



社会科の実践

“本気”のための

「課題の設定」過程の工夫

①児童と教材の距離を縮める

児童にとって社会的事象は必ずしも身近でない。そのため、実物や映像・統計資料など直観的に社会的事象や人々の営みの特徴が捉えられる資料を提示することで、児童の興味・関心が高まり、意欲の喚起が期待できる。

②児童の当たり前を揺さぶる

児童の既存の知識や経験による感覚とのずれを生むような社会的事象を提示する。そのずれによって、「こうなるに決まっている。」「こうなってほしい。」という児童の思いを揺さぶる。このことにより、なぜそうなっているのかを調べたいという追求意欲が高まる。

③数量に対する驚きを与える

多い・少ない、広い・狭い、長い・短い、大きい・小さい等の数値は児童の驚きや問いを生むのに適している。日常生活で感じている数量の感覚との差異を提示したり、複数の数値を比較させたりすることで、「なぜ多い(少ない)のか。」「なぜ広く(狭く)なったのか。」等の問いが生まれる。

④必要感・切実感を与える

現在の社会の中にみられる問題点を提示することで、「このままではいけない。」「何とかしたい。」という問題意識をもたせることができる。問題意識を解決するために学ぶ必要があり、学んだことを基にして社会に働きかけたい、働きかけなければならないという思いから追求意欲が高まる。

“本気”のための

「まとめ・振り返り」過程の工夫

①自分たちができることを考え、実行する

よりよい社会を目指し、単元で獲得した知識を生かして自分に出来ることを考え、意思表示をさせたり、実行に向けた計画を立てさせたりすることで、学びと日常生活の関連を意識させる。

②学習したことをまとめる

関係図やグラフ等を活用し、学習内容を新聞やレポートにまとめさせることで、単元の学びを再認識させる。

③近未来についての予測をする

単元で学習した内容を基に、社会や地理、歴史、環境等の背景を踏まえてこれからの時代がどのように変わっていくのか、どのように変わっていかなくてはいけないのかなどを自分のこととして考えさせることで、単元の学びを生かそうとする態度を育てる。

見方・考え方を働かせる指導の工夫

①資料提示の工夫

社会的事象の見方・考え方を働かせて考えるためには、地図や年表、図表等の資料が必要な場面で十分に生かしていくことが大切である。しかし、ただ地図を見せれば児童が空間的な広がりに着目するとは限らないし、年表を見せれば児童が時間の経過に着目するとは限らない。着目させたい視点を明確にし、児童が自ら比較したり、関連付けたりするように資料の提示を工夫した。

A 対 比 型	写真やグラフ等で社会的事象を複数提示することで、相違点に着目させる。そこから、「なぜ情報 A と情報 B は違うのだろう。」等の疑問が生まれる。情報 A の特色や意味をより明確に見出すために情報 B を比較対象に設定するという意図がある。
B 関 連 型	関連性のある情報 A と情報 B にかかわる写真やグラフ等を提示し、児童に読み取らせることで、共通点や相似点を浮き彫りにする。そこから、「情報 A と情報 B はなぜ似ているのだろう。」等の疑問が生まれる。情報 A と情報 B の関連性に着目させ、その意味や仕組みを考えさせる意図がある。
C タ イ ム マ シ ン 型	時間の変化とともに、情報 A が情報 B に変化したという事実を提示することで、情報 A から情報 B に変化する間に何があったのかに着目し、「〇年間に何があったのだろう。」等、また情報 A が変化しない場合「なぜ〇年間も変わらないのだろう。」等の疑問が生まれる。情報 A と情報 B の時間の経過に伴う変化や継続から、その間の出来事や人々の働きに着目させる意図がある。
D ラン ダム 型	いくつかの情報をランダムに提示して、それらの位置や時間の順序等を考えさせる。その理由を交流することで、児童同士の考えにずれを生じさせ、「本当はどうなっているのかを調べてみたい。」という思いをもたせる。空間的な視点、時間的な視点等の視点を明らかにした学習を展開する意図がある。
E 対 立 型	相反する情報からずれを見付け、自らの立場や意見の違いに着目させる。単元の前半において一定の情報を習得した後に、新たな学習課題を設定し、判断・意思決定に繋げていくことを意図している。

②問いの工夫

社会的事象の見方・考え方を働かせるためには、「問い」の設定が必要であると考えた。「空間的」「時間的」「関係的」等の視点に基づいてどのような「問い」を設定するかで獲得する知識も変わってくる。したがって、獲得させたい知識を明確にし、視点に着目させるような「問い」を設定することで、児童が問いを基に調べて社会的事象を見出し、それについて考えたり、判断したりして社会的事象間の関係や特色を捉えることができるようにした。

	A 事実を問う	B 理由や根拠	C 選択・判断
① 空間的	①-A ・どこにあるか ・どのように広がっているか	①-B ・なぜそこにあるか ・なぜ広がっているか	①-C ・どこにつくったらよいか ・どのように広げていったらよいか
② 時間的	②-A ・いつか ・どのように変わったか	②-B ・なぜ始まったか ・なぜ変わったか	②-C ・いつから行ったらよいか ・どのように変えていけばよいか
③ 関係的	③-A ・どのように繋がっているか ・どのような工夫があるか	③-B ・なぜ繋がりがあのか ・なぜ工夫をするようになったか	③-C ・どのように繋げていけばよいか ・どのような工夫が必要か

③学習活動の工夫

社会的事象の見方・考え方を習得するということは、単元の学習を通して身に付けた見方・考え方を生かして社会の中の様々な事象を捉えることができるということである。そのためには、社会と同じように様々な立場に立って物事を考えたり、様々な事例で同じように考えたり、自分なりの解釈や判断をしたりすることが必要であると考えた。

A 多角的 様々な立場から考える

社会的事象にかかわっている様々な立場の人々の存在に気付かせ、それらの人々の思いや願いを考えさせることで、新たな問いが生じ、対話の必然性をもたせることができる。

B 再構成 既習を生かして他の事例に適応する

単元の学習を通して身に付けた法則や理論、言い換えると見方・考え方をを用いて新しい事象を見ることで、学習内容を再構成することができ、社会的事象の見方・考え方の習得とともに学習内容のより深い理解に繋がる。

C 判断・意思決定 既習を生かして意思決定させる

自分の選択がどのような事態を招くことになるのかを予測したり、社会的事象の詳細な分析をしたりして判断させる。また、それぞれの判断を集団で比較させ、批判・吟味させることで、意思決定に繋げ、社会的な見方・考え方が高まるようにする。